

5. 科学創造コース2年生の実践

継続研究

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

本研究活動は、高校2年次の科学創造の時間において、生徒が1年間をかけて各自が設定したテーマに取り組むものです。この活動の目的は、生徒が自ら課題を発見し、調査・分析・考察を通じて論理的思考力や問題解決能力を身につけることです。研究のプロセスを通じて、情報収集の手法やデータ分析の技術を習得し、最終的に自らの成果を適切に伝えるプレゼンテーション能力の向上を目指しました。

生徒たちは、自身の興味・関心に基づいてテーマを設定し、探究を進めました。「Free-to-playゲームの課金による勝敗への影響」「日焼けを短縮する食べ物は本当に効果があるのか?」「難病患者とのコミュニケーション」「降水量とセミの個体数の関係」「運動習慣と睡眠の質の相関について」など、ユニークなテーマが多く選ばれたことが特徴的でした。こうした個別のテーマに基づく探究活動は、単なる知識の習得にとどまらず、今後の学習やキャリア形成においても主体的に考え行動する力を養う機会となりました。

＜実施内容＞

研究活動は、以下のプロセスで進められました。①まず、各自が興味を持つテーマを設定し、先行研究の調査を行いました。学術論文や書籍、インターネット上の情報を活用しながら、研究の背景を整理しました。②次に、研究計画を立案し、具体的な調査方法を決定しました。実験を伴う研究では、対象者を選定し、データを収集するプロセスを慎重に設計しました。

例えば、「運動習慣と睡眠の質の相関について」の研究では、一定期間にわたり被験者の運動状況と睡眠の質をスマホアプリを活用して記録し、統計的分析を行った。また、「Free-to-playゲームの課金による勝敗への影響」の研究では、実際のゲームプレイデータを収集し、課金の有無による勝率の変化を分析しました。

これらの研究成果は、静岡大学で11月に開催された「探究情報コンテスト」に出展し、外部の専門家や大学生からアドバイスを受ける機会を得ました。そこで得た助言をもとに、データの精度向上や考察の深掘りを行い、より完成度の高い研究へと発展させました。その後、年度末の2月から3月にかけて、最終報告会においてポスターおよびスライドを用いた発表を実施しました。

＜成果の検証＞

本研究活動を通じて、生徒たちは主体的に情報収集を行い、データを分析する力を身につけました。研究の初期段階では、テーマ設定や調査手法の確立に苦戦する場面もありましたが、外部からの助言を受けながら課題を修正し、より精度の高い成果を導き出すことができました。

「探究情報コンテスト」に参加したことで、外部の視点を取り入れる重要性を認識し、論理的な考察の深化が図られたと思われます。例えば、「降水量とセミの個体数の関係」の研究では、気象データと生物観察の記録を比較する中で、データのばらつきに関する指摘を受けていました。これを踏まえ、データの補正を行うことで、より説得力のある結論を導くことができました。

また、最終報告会では、研究内容を効果的に伝えるために、ポスターやスライドの構成を工

夫し、聴衆の関心を引くプレゼンテーションを実践しました。これにより、伝える力や論理的な説明能力が向上し、今後の学習や進路選択にも大きな影響を与えることが期待されます。

＜今後の展開＞

次年度以降、本活動をさらに発展させるために、外部機関との連携を強化し、研究内容をより学術的な視点で深める機会を増やすことが望ましいと考えます。また、生徒同士が相互にフィードバックを行う場を設けることで、研究の質を高める工夫が必要です。



▲コンテストの様子 1



▲コンテストの様子 2



▲コンテストの様子 3



▲コンテストの様子 4



▲コンテストの様子 5



▲コンテストの様子 6

ET ロボコン

<カリキュラム上の位置付けと目的>

ET ロボコンは、組み込み技術を学ぶエンジニア育成を目的としたロボットコンテストです。本校では、ソフトウェア開発のプロセスやプロジェクト・マネジメントの実践的学習を目的に参加しました。

本大会では、UML (Universal Modeling Language) を用いたモデル設計が重視されます。これにより、生徒は論理的思考力や課題解決能力を向上させることができます。また、本プロジェクトは、「情報Ⅱ」の学習指導要領にも適合し、システム設計やプログラム制作の理解を深める機会となります。実際の競技を通して、自身の設計がどのように機能するかを確認できるため、理論と実践を結び付けた学びを得ることができます。

<実施内容>

本校からは普通科科学創造コース2年生の希望者3名が、エントリークラスとプライマリークラスに参加しました。1年次に「情報Ⅰ」でPythonを学んだ経験があるものの、本格的な開発は初めての取り組みでした。

5月中旬に活動を開始し、毎週火曜日に技術教育プログラムを受講しました。シミュレータを用いた走行制御、センサーを活用した設計、UMLモデリングツールastah*（アスター）を使用してUMLによるモデリングを学習しました。C++言語の基本的な文法についても補習を行い、より高度なソフトウェア設計に対応できるよう準備を進めました。7月からはPBL的学習を導入し、試走会や本番大会に向けた準備を進めました。

試走会ではソフトウェアの設計改善を重ね、9月にはプライマリークラスの試走会に参加しました。実機を使用することで、シミュレーション環境との違いを体験し、環境変動に対応する設計の重要性を学びました。特に、外部環境の変化がセンサーの値に影響を与えることを理解し、それを克服するための工夫を凝らしました。10月の大会では受賞には至りませんでしたが、想定通りの走行を実現し、提出したモデルに対するフィードバックを得ることができました。



▲プログラミングを行う様子



▲ET ロボコン大会参加の様子

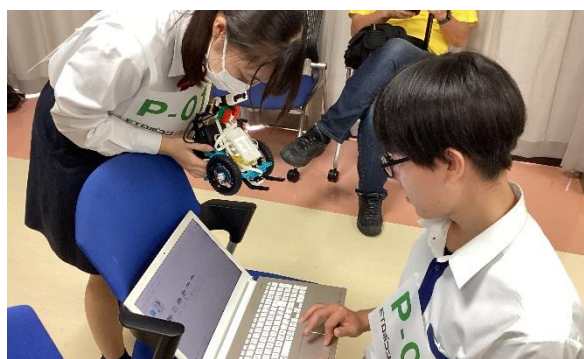
＜振り返りと成果の検証＞

本大会を通じて、生徒はソフトウェア開発や設計の実践的なスキルを身につけ、技術的な理解を深めることができました。特に UML を活用した思考整理の重要性を実感し、設計段階での計画の精度が競技の結果に大きな影響を与えることを学びました。試走会や大会では、環境変動を考慮した設計の必要性を学び、同じ機体でもソフトウェアの違いによって性能が大きく変わることを体験しました。

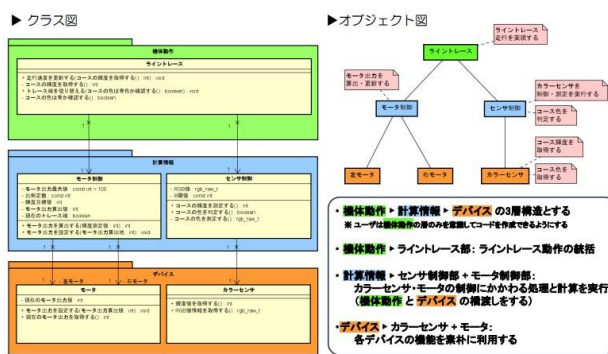
大会後は次年度の技術開発と新入生の勧誘に取り組んでいます。技術開発では、UML を活用するモデリング部門と環境適応型ソフトウェアを開発するソフトウェア開発部門に分かれ、それぞれ成果発表を目指しています。モデリング部門では、ゲームの設計を通じて UML の実践的な活用方法を研究し、ソフトウェア開発部門では、環境に左右されない自己位置推定技術を活用したロボット制御の研究を行っています。

また、科学情報演習の授業において科学情報コースの 1 年生に対して競技の紹介を行い、来年度以降の活動継続を促しました。外部発表にも挑戦する予定であり、5 月に開催されるシステム制御情報学会への参加を計画しています。これにより、より専門的なフィードバックを受け、技術のさらなる向上を図る予定です。

ET ロボコンを通じて、生徒は実践的な学習機会を得て、今後の学習やキャリア形成に役立つ貴重な経験を積むことができました。次年度はより高い目標を設定し、さらなる技術向上を目指します。



▲大会に参加している様子



▲UML を使用してかかれた図

6. 学年をまたいだ実践

科学情報コース1年生・科学創造コース2年生「鳥と電信柱」に着目した科学研究のサイクル ＜活動のポイント＞

- ①生徒の主体性を尊重した科学研究の流れを体験する。
- ②身近な自然をテーマとした、課題発見および解決能力を育てる。
- ③ポスター発表を通して、科学的なものの見方・考え方を養い、コミュニケーション能力を高める。

＜活動の狙い＞

研究の共通テーマである「鳥と電信柱」は、三上修著「電柱鳥類学：スズメはどこに止まっている？」（岩波科学ライブラリー）を参考としています。身近なテーマで自ら心のうちから発した不思議をエネルギー源として、活動に邁進してほしいと考えています。電信柱は身の回りにありふれていますが、100年前にはなかったものであるし100年後にも存在しないかもしれません。そのため、電信柱という現代にしか存在しないものを対象として鳥の調査を行うことには意味があります。

＜実践紹介＞

本活動で、「電信柱と鳥」に着目したのは、調査活動を学校への登下校時に行うことができ、特別な道具を必要としない点です。本来、科学研究というものは高価な実験器具や特別な場所でなくてもできる、ということを経験させたいからです。本活動の実践では、生徒へ向けて活動推進力を育成するために、次の3つの仕掛けを作りました。1つめの仕掛けは、不思議に気付く着眼点の育成です。「不思議に気付くこと」ができるように、電線にモズが止まった1枚の写真を見せて考えさせました。このとき、①批判をしない、②自由奔放、③質より量の3点を意識させて、多くのアイディアを出させました。その後、各生徒のアイディアを発表させ、全体で共有した。2つめの仕掛けは、自らの気付きによる不思議（仮説）に基づく活動です。「マツタケはどうして高価になったのか」について自分なりの仮説を立てさせました。3つめの仕掛けは、一人1枚のポスターを作成することです。データ解析やポスター作成では教え合い、協働作業ができますが、最終的には自分自身でポスターを作成するという意識を持たせました。完成したポスターはA0サイズに出力し、ポスター交流会を行いました。他学年の生徒も交流に参加したことにより、より多くの意見をもらうことができました。交流会後、生徒は相互評価を行いました。

＜振り返りと成果の検証＞

全体の活動テーマは、「電信柱と鳥」という限定されたテーマであっても、生徒は各自の不思議（仮説）に基づいた活動を推進しました。研究テーマは多様で、活動時間はどれだけ多くても十分なことはありませんでした。生徒により活動の進展具合、天気の影響でデータが得られない、パソコンの技量などに大きな差がみられました。そのため、一人の教員が同時進行で多様な場面に対応する必要があり困難が生じましたが、パソコンの技量に長けた生徒が3人いたことで助けられました。さらに、A0サイズのポスターが出来上がった時には、多くの生徒がやりがいを実感できていたようです。



▲作成したポスター例

文化祭（地域創造コース）

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

本年度の文化祭は、1年生から3年生までの地域創造コースの生徒全員が参加し、2年生が中心となって企画・運営を行いました。本活動は、地域創造コースの授業である「地域創造演習」および「地域創造概論」の一環として実施されました。

また、この活動は単なる文化祭の開催にとどまらず、生徒たちの企画運営能力やチームワークを養う貴重な機会でもありました。生徒が主体的にテーマを決定し、調査・企画・実行までを一貫して行うことで、実践的な問題解決能力を育成しました。特に、各チームが問題に直面した際に協力して解決策を見出す過程では、チームワークの重要性を強く実感したと同時に、問題解決に向けた柔軟な思考を身につけることができました。

さらに、文化祭の運営を通じて、生徒たちは発信力や表現力の向上にも取り組みました。自分たちのアイデアや意見を実際のイベントで発信し、それをどのように表現して伝えるかを考える中で、コミュニケーション能力が飛躍的に向上しました。この経験が、今後の地域活動や社会参加に役立つ重要なスキルとなることが期待されます。

＜実施内容＞

文化祭のテーマは「懐かしのアニメ」とし、親世代をターゲットにした内容を企画しました。1月から準備を開始し、2年生が中心となってアンケートを実施し、人気のアニメ作品をリサーチしました。その結果、日本のアニメが世界的にも文化として認められている点を活かし、特に親世代に馴染みのあるアニメを取り上げることとしました。

アニメのジャンルを「スポーツもの」「ジャンプ系」「藤子不二雄作品」「魔法少女系」「変身系」の5つに分け、それぞれの特徴や代表作品を調査しました。

アニメに関連した小物や衣装を手作りし、会場の装飾を担当しました。また、アニメ作品に合わせたバックボードを作成し、映像として流れるCMも自ら制作して、会場全体に視覚的な魅力を加えました。さらに、アニメの主題歌に合わせたダンスパフォーマンスを準備し、来場者と一緒に盛り上がる時間をつくりました。このように、生徒たちはそれぞれの得意分野を活かし、一丸となって文化祭を成功に導くのが本コースの文化祭の特徴です。



▲文化祭準備の様子



▲文化祭準備の様子



▲ダンスパフォーマンス練習の様子

＜成果の検証＞

文化祭当日は、多くの来場者に恵まれ、特に親世代の方々から「懐かしい」「昔を思い出した」といった感想を多くいただきました。来場者の中には、アニメの思い出に感動し、涙を流している方も見受けられました。文化祭終了後には、生徒たちもその感動を胸に涙を流している姿

があり、彼らにとっても大きな意味を持つイベントとなったことが伺えました。このような感動的な経験を通じて、生徒たちは企画立案や運営に必要なスキルを実践的に学ぶことができました。

特に、予期せぬ問題が発生した際には、その場で迅速に対応する力や、他者と協力して課題を解決する重要性を実感する貴重な機会となり、自己の成長を感じることができたようです。また、この活動を通じて、チームワークや責任感が養われ、今後の活動においても活かせる実践的なスキルを得ることができたと感じています。



▲当日のパフォーマンスの様子

＜振り返りシートからみる生徒の成長＞

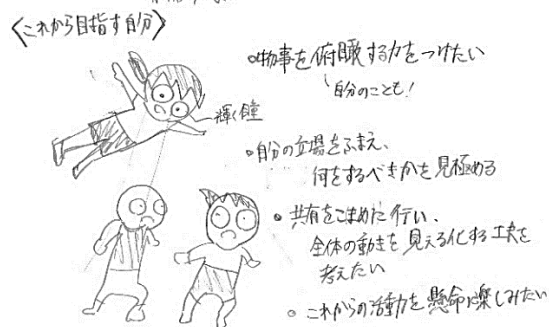
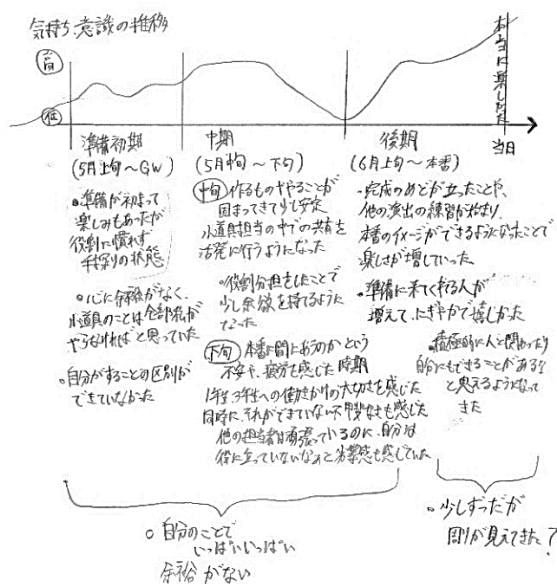
文化祭後、生徒たちが記入した振り返りシートを通じて、生徒の成長をより具体的に感じることができました。多くの生徒が、イベントの企画や運営を通じて得た経験が、自分にとって大きな学びになったと感じており、その中でも特に「チームワークの重要性」や「問題解決能力の向上」を挙げている生徒が多く見受けられました。

例えば、一部の生徒は、最初は役割分担に対して不安を感じていたものの、イベント中に予想外の問題が発生した際、メンバーと協力しながら迅速に解決策を見出せたことで、自信を深めたと書いています。

また、「お互いの意見を尊重し、協力し合うことの大切さを実感した」という感想もあり、コミュニケーション能力や柔軟な対応力が身についたことが伺えました。

振り返りシートには、文化祭に向けて取り組んだ作業や役割分担に対して「達成感を感じた」と記入する生徒が多かった一方で、反省点も率直に書かれており、今後の改善点に繋がる貴重なフィードバックとなっています。これらの反省点を踏まえ、次回に向けた課題として、よりスムーズなコミュニケーションを図る方法や、準備段階での役割分担の見直しが必要だという意見もあり、次回以降に生かすべき具体的な改善策が見えてきました。次のページは、生徒の振り返りシートからの抜粋です。

〈文化祭振り返りシート一部抜粋〉



▲生徒 A の振り返り自由記述

プロジェクトをやるときに情報共有が大切だと思った。
共有しない相手があるをやっているか分からなくなってきてしまうし、
孤立状態になってしまう。また、苦しい状況のときに雰囲気や
暗い色やに比べて明るい色でその人の状況のときこそ、明るく
やることを意識したいと思った。

今の人は人に類することや昔の信用することや怖が、たけに
不承とつててあら、たり、衣裳の確認をしてもらったりと
なるべく自分一人で行うように人に類のことを意識し
てやることをやるようになった。シーリングやLINEの呼び
かけするのが怖がたりと文化祭前よりはやるうに、たし、
人の関わりも少し嫌がたりと年生とかはじめて話さうな人
と話せるように名前を呼ぶことを意識した。
普段話さるう人は怖がたりとフコクトを造ることにした
去年は言わねたことを怖がたりとたけの演劇やダンスとかの
改革を積極的に言うことをした。

花梨がりのおとくに代用方法として、ごーん袋（ビニール）を考へてい
たことに「とりあえず」やってみる。これが大事だと思ふ。

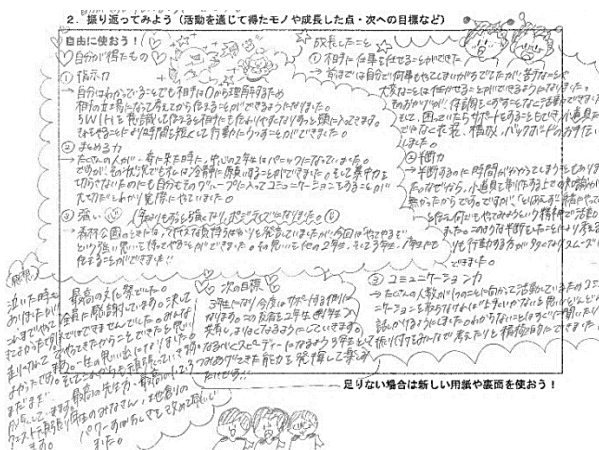
自分か、一人でやろうとすると、せかまは、あるので、頼ることを意識
して、いたらしい。自分か、どうしよう、と、悩んだときに、後回しにして
相談しないときがある。どう、気をつけたい。また、情報共有のときに
相手の気遣えども、相手か、自分か、なにか、に共有で、したことに、なさない、の
含み、や、説明、して、いた、らしい。

▲生徒 B の振り返り自由記述

自由に使おう！

準備期間中の正直、中心メンバーはくちもすくすく辛かった。
本書の因は得に、けれども辛いことは一生懸命取り組んだ
からこそ得られた達成感や楽しさだと思うし、今後も
忘れざるべしな感情だと思う。書庫中にはちろ度員の夜にどう
かたたくて見えて、さらにお人なのことが好みに合った。二人に
大きな集団で何かを成し遂げるという経験は同じ年代の
高校生全員が必ずするわけでは無いと思うし、とても貴重な経験
だと思つて大層にしたい。これからは何かモノも物としていく
なり文化祭で得られた感情や経験を生かしていきたい。
また部活で参加していたというのを活かそうと思うのでこのうら
ちメンバーに迷惑がかかろうというように、自分も置いていかれ
ないようにはつとめることを徹底したい。

▲生徒 C の振り返り自由記述



▲生徒 D の振り返り自由記述

2. 振り返ってみよう（活動を通じて得たモノや成長した点・次への目標など）

自由に使おう！

成長した点

まず、活動と振り返り。活動中にほとんどの毎日参加した。表現と出し
たり知らない事となるべくないようにしたりと、全体的に主体的に取
組めたかなと思います。昨年の森林公園アロジクトの時は、自分だけレ
ンバーではないかと。他人専のような取り組みをしていたので、そこが
成長した点です。さらに、自分は今回の文化祭でも初めて、責任者とい
う一時的な立場で活動に取り組みました。活動を通して、責任者
として、皆んなに情報を共有する大切さ、自分から先に行動して、
皆んなと引っぱる。言いなけなはいけないこと、皆んなと盛り上げなけな
いけないこと、責任者とは、誰かに任せていいとはいえないこと。など。今までの
活動とは、異なり、責任者として、活動に携わったことで、学んだこと、かたじけ
ありません。それを次に活かしていこうと思います。

足りない場合は新しい用紙や裏面を使おう！

▲生徒 E の振り返り自由記述

<生徒が作成した資料>

テーマの理由

「懐かしの」である理由
今回のターゲットは親
私たち世代のヒーローヒロインではなくて
親の世代のヒーローヒロイン
「こういうあつた!!」
「懐かしい!!」と思ってもらおう

「アニメ」である理由
ヒーロー・ヒロインのアンケートを実施
(高校生・地域中高3年生・4年生の保護者)
圧倒的 **アニメ**
アニメの名前やキャラを書いた人が多数
日本のアニメ
世界の中でも文化として認められている
Pop culture

ジャンル分け

5つのジャンル

- スポーツもの
- ジャンプ
- 藤子不二雄
- 魔法少女系
- 変身系

流れ

OP → ED

D B → ジャンプ → ナレレーション → 魔法少女系 → セーラムーン → ガッチャマン → 藤子不二雄 → スポ根 → キン肉マン → D B

流れ

OP → ED

D B → ジャンプ → ナレレーション → 魔法少女系 → セーラムーン → ガッチャマン → 藤子不二雄 → スポ根 → キン肉マン → D B

DB・ジャンプ

『ドラゴンボール』
・80年代
・ジャンプの漫画
・1986年～1989年にアニメ放送された
OP・EDテーマ曲
「摩訶不思議アドベンチャー」
「ロマンティックあげるよ」

『Dr.スランプアraleちゃん』
・80年代
・ジャンプの漫画
・1981年～1986年にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「ワイワイワールド」
「はいちゃ!!」

流れ

OP → ED

D B → ジャンプ → ナレレーション → 魔法少女系 → セーラムーン → ガッチャマン → 藤子不二雄 → スポ根 → キン肉マン → D B

魔法少女・セーラムーン・ガッチャマン

魔法少女
『魔法使いサリー』
・60年代
・1966年～1967年にかけてテレビ放送
・1966年～1968年にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「魔法使いサリー」
「いたずらのうた」

『ひみつのアッコちゃん』
・60～70年代
・1969年～1970年にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「ひみつのアッコちゃん」
「すきすきソング」

魔法少女・セーラムーン・ガッチャマン

『セーラムーン』
・90年代
・1992年～1997年にかけてテレビ放送
・連載と同時期にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「ムーンライト伝説」
「HEART MOVING」

『科学忍者隊ガッチャマン』
・70年代
・1972年～1974年にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「ガッチャマンの歌」
「銀ざしキャラクター」

流れ

OP → ED

D B → ジャンプ → ナレレーション → 魔法少女系 → セーラムーン → ガッチャマン → 藤子不二雄 → スポ根 → キン肉マン → D B

藤子不二雄

『パーマン』
・60年代～80年代
・1966年から漫画連載
・1967年～1968年にアニメ放送(第1期)
OP・EDテーマ曲
「きてよパーマン」
「パーマンはそこにいる」

『エスパー魔美』
・80年代
・1987年～1989年にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「エスパー魔美」
「不思議Angel」

流れ

OP → ED

D B → ジャンプ → ナレレーション → 魔法少女系 → セーラムーン → ガッチャマン → 藤子不二雄 → スポ根 → キン肉マン → D B

スポ根・キン肉マン

スポ根
『キャプテン翼』
・80年代
・ジャンプの漫画
・1983年～1986年にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「燃えてヒーロー」
「冬のライオン」

『アタックNo.1』
・60年代～70年代
・1969年～1971年にアニメ放送
OP・EDテーマ曲
「アタックNo.1」
「パン・ボ・ボン」

スポ根・キン肉マン

『キン肉マン』
・80年代
・ジャンプの漫画
・1983年～アニメ放送
OP・EDテーマ曲
「キン肉マン」
「肉・2×9・Rock'n Roll」

アキラマン

まとめ

皆さんに協力していただきたいです!!!
よろしくお願いします

今年の文化祭は…

「懐かしのアニメ
ヒーローヒロイン大集合」

▲文化祭内容説明資料

演劇部	音楽部	美術部	体育部	生活部	保健部	図書部	情報部	文化部	その他
1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他	1. 演劇部 2. 音楽部 3. 美術部 4. 体育部 5. 生活部 6. 保健部 7. 図書部 8. 情報部 9. 文化部 10. その他

▲役割分担表

文化祭（科学情報コース）

＜カリキュラム上の位置付けと目的＞

本活動は、6月に行われる文化祭における生徒主体の探究学習として位置付けられ、科学的思考力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の向上を目的としています。特に、1年生と2年生が協働することで、学年を超えたチームワークの醸成が図られました。2年生はワークショップの企画・運営を担当し、主体的にアイデアを考案・提案し、プロジェクトを運営する力を養いました。1年生はサイエンスショーの運営に関わることで、科学実験の実演や説明を通じて、論理的思考力やプレゼンテーション能力を高める機会となりました。

本活動を通じて、科学への興味を広げるとともに、実験の楽しさを来場者に伝えることを目的としています。生徒たちは、単なる知識の伝達ではなく、観客の興味を引く工夫や、分かりやすい説明の技術を習得し、今後の学習や活動においてプレゼンテーション能力や協働する力を活かすことが期待されます。

＜実施内容＞

本活動は、ワークショップ・サイエンスショーの企画・準備と、文化祭当日の運営を行い、5月からプロジェクトを開始しました。

ワークショップの準備においては、科学創造コースの2年生が「科学に親しみやすい内容」を考え、複数のアイデアを発案しました。各アイデアは、1・2年生全員の前でプレゼンテーションを行い、投票によってワークショップ内容を決定しました。その後、具体的な準備に取りかかり、必要な実験器具や材料の調達、手順の確認、参加者向けの説明資料の作成などを行いました。

ワークショップは、「紫キャベツ溶液を使った色が変わる絵の具でお絵描き」「砂鉄を入れたスライムで動くスライムづくり」「ミニ凾を作りと凾揚げコンテスト」「プラ板で3Dホログラム作り」「ミニパラシュート作り」「割り箸を使った工作」の6種類を実施しました。来場者に気軽に参加してもらえるように10分前後の短時間で参加できるような構成を考え、細かく事前準備を行ないました。また、作成したものを持ち帰ってもらうだけでなく、家庭で実験や工作ができるように子どもにもわかりやすい内容を心掛け、説明資料を作成しました。

サイエンスショーは、1年生が司会を行い、1日2公演計4公演を行いました。サイエンスショーでは、「振り子の実験（ペンデュラムウェーブ）」「自転車の車輪を使ったジャイロ効果」「巨大シャボン玉の中に入ってみよう」という3つの実験を披露しました。大掛かりな装置を作成するため、材料や作り方にも工夫をこらし、予算内で実験装置を作ることに苦心する場面も見られました。

各実験については、事前に十分なりハーサルを行った上で、観客の前で実演を行いました。生徒たちは、科学的原理を分かりやすく伝えるための説明方法を考え、実験の進行をスムーズに行うための練習を重ねました。

＜成果の検証＞

本活動を通じて、生徒たちは科学的な知識を深めるとともに、伝える力や協働する力を高めることができました。また、日頃のコースでの活動を知ってもらう広報的な側面もあり、生徒が来場者に日頃の学びについて説明する姿も見られました。ワークショップでは、多くの来場者が参加し、特に小学生や保護者から「楽しく学ぶことができた」「作り方が分かりやすかった」「家に帰ってやってみたい」などの声をいただく事ができました。また、実験に関して質問をする来場者も多く、生徒たちはそれに適切に応答できるように実験の原理をより深く理解する必要があり、一人ひとりが理解を深める機会となりました。

サイエンスショーでは、観客の興味を引く演出や実験のタイミングを工夫することで、効果的なプレゼンテーションの手法を学ぶことができました。観客からは実験が成功すると歓声があがり、生徒にとって大変励みとなっていました。実施後には、生徒たちから「どのように見せるとより興味を持ってもらえるのかを考えた上で、改善して実験を見せることができた」「実験の仕組みを説明することで、自分自身の理解も深まった」といった感想が聞かれました。

次年度以降も、今回の成果を活かし、より発展的な内容のワークショップやサイエンスショーを企画することが期待されます。また、準備や当日の運営における段取りやチーム内の役割分担をさらに工夫することで、より円滑な活動が可能となると考えています。



▲ワークショップの内容をプレゼンする様子



▲ワークショップの来場者に作り方を教える様子



▲サイエンスショーで巨大シャボン玉を作る様子



▲サイエンスショーで振り子の実験を見せる様子

7. その他の実践

修学旅行の改善（種子島観光プロジェクト）

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

2年次に行う修学旅行の探究的なプログラムへの改善は、本研究の大きなテーマでした。これまで熊本県で地域活性化の取組についてフィールド調査を行い調査レポート作成する取り組みや、地元で行っていたポスター制作プロジェクトを訪問先で実施してきました。こうした修学旅行の取り組みを発展させるため、令和4年度より種子島での修学旅行実施の可能性を調査してきました。地域内の移動時間・文化的特徴・農業や工業などの固有の産業などを調査し、島という閉鎖環境が探究的な活動を行うことの有効性を実感しました。昨年度は、修学旅行で行ったポスターと動画制作の様子がテレビや新聞などの報道で取り上げられ、取り組みに注目して頂けました。本年度も、高校2年生が様々な体験や調査活動を通じて、「観光が地域にもたらすメリットとデメリットについて考察する」という課題に生徒それぞれが向き合う事を目指しました。特に、調査した結果を基に考察することを重視し、課題の設定を行いました。さらに昨年に引き続き地域の映像コンテンツとしてポスターを制作する活動を発展させて、観光PR動画も制作するプロジェクトも並行しました。

＜実施内容＞

11月18日から22日にかけての5日間、鹿児島県種子島での実施となりました。エコツーリズム・アグリツーリズム・フードツーリズム・コンテンツツーリズムの各視点で、体験型のプログラムを実施しました。この際、事前に現地の方々との打ち合わせを実施し「①事前に生徒に説明しすぎない、②現地で生徒に観察・考える・気づく時間を与える、③生徒からの質問に対応していただく」の3点に配慮いただき、余裕のある行程を代理店とともに計画しました。農業の六次産業化やブランド化や観光政策としてどのようなPRをしているかについて、訪れる先々で熱心に現地の方々へヒヤリング調査を行っていました。夕食を自由食に設定したことで、より現地の方々との交流やヒヤリング調査の機会が増えました。

また、修学旅行期間後半の2日間をかけて行われた現地で観光PRコンテンツを制作するプロジェクトには7名の生徒が参加しました。事前に学校でどのようなコンセプトで観光PRが行われているのか調査しましたが、実際に現地で過ごした感覚を大切にする方向性を採用しました。行程の中で出会う方々と交流する中で、観光地や名産ではない日々の生活の大切さに気づくことができました。こうした感覚を表現しようと「島での生活でもそこに暮らす人たちの数だけ思い出や青春がある」というコンセプトを定めまし。撮影は2日間かけて島内中部を丁寧にフィールドワークし、2000枚に近いカットを撮影しました。学校に戻った後、撮影した中から候補を選びロゴ・コピーライト・画像補正と印刷を経て、5枚のポスターと動画2本が完成しました。完成したポスターと生徒の調査レポートは現地の役場の方に共有し、今後の観光PRに活用していただくことになりました。

＜成果と検証＞

修学旅行を「探究的な学びの場」に変える教育旅行への回帰は、探究創造科ならではの修学旅行実施に向けた大きな課題でした。事前に現地を訪問して関係作りや現地調査を行うコーディネーターとしての活動、コンテンツ制作ではプロジェクトの実行者、完成後は地域行政と繋

ぐコーディネーターとして、様々な立ち位置での活動が求められました。修学旅行という限られた時間の中で活動するという制約を「アイディアソン形式のプロジェクト実行の機会」ととらえ、探究型プロジェクトの実施に取り組みました。このプロジェクトは本校で実施しているポスターや動画制作を基本としており、自分たちの地域で培った地域の魅力を捉える視点を他県でも実践することで、表現の手法や効果について客観的に検証することができました。活動を通じて、現地で活動して終わりではなく、自校に戻ったあともポスター・動画制作やレポート作成、そして成果を現地と共有するという、修学旅行後も関係性が続いていきました。自校での制作活動中でも生徒が現地での思い出を語る姿が見られ、修学旅行後も持続する関係人口の構築に繋がったと実感できました。



▲ポスター制作の様子



▲制作途中のポスター画像

課題

観光が地域に与えるメリットとデメリット

個人のテーマ

種子島に暮らす人々が種子島で暮らす理由やその暮らし方について調査し、種子島で観光が行われることによる人々やその地域への影響について考える。

個人のテーマの設定理由

課題である「地域」を今回訪れた種子島と設定し、種子島で暮らす人の生活をしり、種子島の雰囲気を感じることで種子島にとって観光がどのようなものであるかを知ることができると考えた。それによって種子島にとっての観光のメリット、デメリットについて考察することができ、そこから地域という広い課題に対する答えが出せると考えたため、このようなテーマに設定した。

調査内容と考察

2日目、安納芋の収穫、焼き芋体験、郷土料理調理体験を行った。

古市さんのお話から主に分かったことは「安納芋の輸送にはコストも時間もかかる」ということだ。種子島という場所であるため安納芋を輸送するだけでも多くのコストがかかり、また、台風などの自然災害の影響も受けやすいようだ。このようなことから考えられるのは、実際に観光客が訪れることで『輸送のコストなどがかかることなく種子島や安納芋の魅力を伝えることができる』というメリットだと思う。

あかりさんのお話からは「特に不便なく暮らせるということ」と、「大学生になって県外に行く人が多い」、「サーファーの移住が多い」ということが分かった。あかりさんは種子島生まれで、20歳で結婚し21歳で種子島に戻ってきた、ということだった。種子島を出た理由は大学へ行くため、戻ってきた理由は親の手伝いをしたい、子供ができ、家族が近くにいた方が子育てしやすいと考えたためだ。子供が通う高校までの施設は揃っているものの、大学や就職先があまりないため島を出る人が多いようだ。この様なデメリットはあるが、ゆっくりとした雰囲気や人が優しい、などの魅力から島に帰ってくる人も多いという。観光客はサーファーが多く、サーフィンの楽しさや前述したような魅力から、旅行に来てそのまま移住する人も多いようだ。



郷土料理体験ではまず買い出しに行った。そこでは食材を買ったが、私たち修学旅行生が一気に同じ食材を買ったため残りがなくなる、という状況になった。ここで考えられる種子島にとっての観光のデメリットは『オーバーツーリズムになりやすい』ということではないだろうか。

※オーバーツーリズム…特定の観光地において、訪問客の著しい増加等が、地域住民の生活や自然環境、景観等に対して受容限度を超える負の影響をもたらす、観光客の満足度を著しく低下させるような状況。(JTB 総合研究所公式ホームページより引用) ニュースでは京都などが取り上げられやすい。

3日目、サトウキビの収穫、ボン菓子づくりの体験を行った。松原さん、牧瀬さんのお話ではゆっくりとした生活を求めて種子島で暮らしている、ということが分かった。ここでいう「ゆっくりとした生活」というのは具体的に、電車やバスなどの決まった時間で動くのではなく、自分の意思で生活を送ることができる、怖い人たちの喧嘩場がない、夜空が綺麗で真っ暗なのがいい、ということだった。福さんのお話でも、大学で他県に出たが地元であたたかさや気を使わなくていい関係性、自然の多い場所が暮らしたいという思いで種子島に戻ってきたと聞くことができた。



あかりさん、牧瀬さん、松原さん、福さんのお話から、観光されることのメリットとして、『島自体の雰囲気や自然など、種子島独自の特色を、観光を通して伝えることができ、移住者も増やすことができる』ということがあるのではないかと考えた。

種子島の学童施設を管理している下田さんにもお話伺った。

運営している学童施設は市から補助金を出してもらい、協力してくれている人や通っている子供には負担がからないよう運営しているという。下田さんはこのように負担の少ない活動を心がけることで地域に活気を生み出し種子島の魅力を発信しようと考えている。今回私たちが餅つきを体験できたように、地域で協力して体験型の活動ができるのが一番いいという思いを聞くことができた。

4日目にはビーチコーミング、草木染め体験を行い、それぞれお話を聞いた。

ビーチコーミングで伺ったお話では、たくさんの人に海に行ってもらうことが重要だと教えていただいた。ゴミが北上する前に種子島でゴミを回収することに意味がある、とのことだった。この様なことを啓発していくためにこのビーチコーミングという活動をしていた。これらのようなことから考えられる観光のメリットは「観光できてもらうことで話を直接聞いてもらえる」ということだと考えた。インターネットによる発信や啓発は確かに世界中の人に見てもらうことができ、ある程度の影響力があると考えられるが、情報がありふれているインターネットでは見つけてもらうことが難しく、伝わりにくかったりするだろう。その様な面で、活動や思いを観光客に直接伝えられることには大きなメリットがあると考えられる。

草木染め体験では主になぜこのような仕事をしているのかについて荒木さんに伺った。荒木さんは「種子島は自然素材の宝庫」、その豊かな自然を工芸品に閉じ込めるように、感性の衰えないように、陶器、染織、食にと日々仕事をしているようだ。この陶染工房は荒木さん一人で運営しており普段からとても忙しいそうだ。観光客が増えにくることによって個人経営のこのようなお店はより忙しくなり、観光客が増えれば増えるだけいい、というわけでもないのかもしれないと感じた。



▲生徒が作成したレポート ※一部抜粋して掲載

8. 活動と進路

地域創造コース

地域創造コースの3年次はキャリア形成のための学年と位置付けています。これまでの活動で得た経験や関心を通じて自らの進路を探究し、培ったスキルを基に進路実現を目指すよう指導していきました。

<志望進路の傾向>

昨年および一昨年同様、今年度も生徒らが志望する学部系統は多岐にわたりました。(グラフ1参照) 今年度の傾向としては以下の2点が挙げられます。

(1) 地域政策、社会学系統の志望者が多数

「地域政策」「地域創造」などの名を冠する学部や、「まちづくり」「観光」などのアプローチで地域に関わることを目指す学部、「社会学」などの分野において地域課題を探究する学部等、地域に関わる学びを目指す学部への志望者が多くいました。

上記の要因としては、「地域」をキーワードとした地域創造コースにおける学びや活動を、進学先においてさらに深めていきたいという生徒のニーズが反映されているものと考えています。

(2) 教育系統の志望者が最多

前年度は「地域政策、社会学」以外に「経営、経済、商」系統の志望者が多数を占めていました。一方今年は、「幼児教育」「保育」「初等教育」「教育学」などといった教育分野への志望者が最も多数を占めました。

上記の要因としては、コースにおける活動が従来型の座学を中心としたカリキュラムと異なる“新たな学び”の形を目指したものであり、それらに刺激を受けた生徒らが教育の分野を志望するようになっていったことが考えられます。

<入試方式の傾向>

地域創造コースにおけるPBL中心のカリキュラムは、具体的な活動実績や面接・プレゼンテーションの試験が必要となる総合型選抜および学校推薦型選抜と相性が良いです。1期生の頃から、地域創造コースでは総合型選抜および学校推薦型選抜を第1志望として入試に臨む生徒が多数でしたが、今年もその傾向は変わりませんでした。(表1参照)

グラフ1 第1志望の学部系統

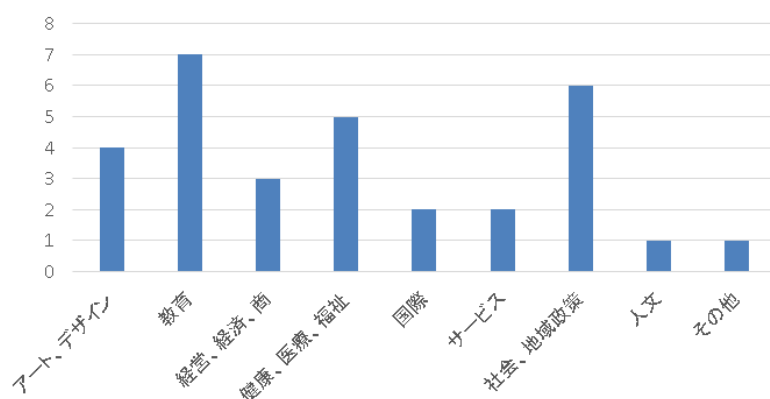


表1 第1志望の入試方式

入 試 形 態	人 数
一 般 選 抜	4
総 合 型 選 抜	21
学 校 推 薦 型 選 抜 (公 募 、 指 定 校)	6

<地域創造コースでの学びと進路実現>

地域創造コースにおける PBL 中心のカリキュラムが進路実現にどう影響しているか、生徒に対してアンケートを行いました。その結果、1 期生や 2 期生同様、「課題設定」「他者との協働」「実行力」「論理的な思考力」「プレゼンテーション能力」など、コースの活動を通じて身に付けることができた様々なスキルやコンピテンシーを入試における自己 PR に取り入れたり、コースでの活動をプレゼン課題に盛り込んだりするなど、地域創造の授業内容が入試において有利に働いたと考えられる回答が多数見られました。その傍証として、今年度「総合型選抜」「学校推薦型選抜（公募制）」の形式で第 1 志望の進路先に出願した生徒 23 名のうち、19 名が合格を勝ち取ることができました。

また、活動に対する生徒の満足度も概して高く、「他の学校やコースでは経験できないような様々な学びや出会いを通じて、自分を成長させることができ、それが進路実現にもつながった」という趣旨の回答も複数見られました。このような反応が得られたことは、地域を軸とした学びを通じて多様なキャリア形成を目指す本コースの設立目的にとって非常に意義深いものであり、今後のコースの継続と更なる授業改善に向けて大きな糧となるものと考えています。

<全体的な満足度> : (10)・9・8・7・6・5・4・3・2・1 (数字に○をつけてください)
満足度 高 ← → 低

<その理由>

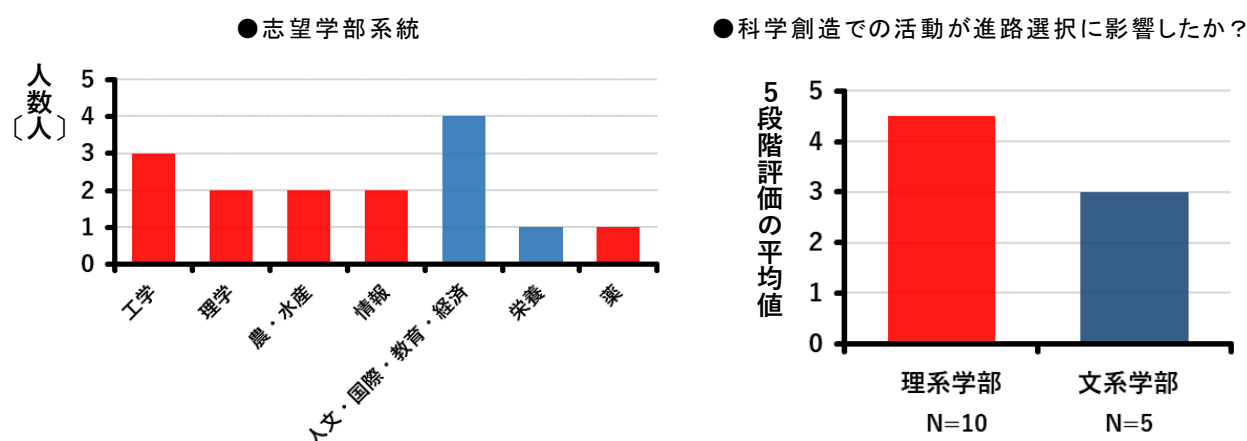
やりがいと挑戦の機会が全部にあるから。また、それを一歩も熱量を持って取り組めるクラスメイト、先生がいるから。
地域創造の授業では絶対に他の学校、コースではできない経験が様々な形で与えられる。何かしつを追求することも、色んなことに挑戦していくこともでき、自分で伸ばしたいものを伸ばすことができるコースだと感じる。実際、授業では地創の取り組みとその
か自信にしている。

▲生徒アンケートの抜粋

科学創造コース

＜志望学部系統と科学創造コースでの学びの影響＞

科学創造コース2期生の志望学部系統は下図に示す通りです。理系学部への進学を志す生徒が10名で、機械、建築土木、化学、生物、農学、水産、薬と興味・関心は多岐に及びます。また、人文・国際・教育・経済といった文系学部への進学を志す生徒も5名おり、コース全体としても多様な志望先がみられました。科学創造コースでの活動が進路選択にどの程度影響したかに関する5段階の評価では、「とてもある」「まあある」が理系学部を志望する生徒では90%を占め、平均4.5と高くなりました。一方で、文系学部志望者では平均3.0と低く、5人中3人が「あまりない」を選択したのが課題です。



＜科学創造コースの学びと推薦入試＞

進路実現において、15名の生徒全員が推薦入試を利用していました。そのうち80%にあたる12名がコースでの活動内容を推薦入試で「とても活かした」「まあ活かした」と回答しています。回答した理由として「受賞歴があったため自信をもって面接に挑むことができた」「主体的に取り組んできた活動であるため、面接での核心に迫る質問にも対応できた」「科学創造の具体的な活動があるため、志望理由書が書きやすかった」といった内容を挙げています。

＜科学創造コースの学びとキャリア発達＞

「科学創造コースでの学びは、将来役に立ちそうか」という設問に対しては、15名中14名(93%)が「とても役立つ」「まあ役立つ」と回答しています。「とても役立つ」という回答をした生徒は、「高校での共同研究活動で身につけた協働する力やレポート作成に必要な力は、大学での活動や卒業研究時に有利になる」「大学進学後や職業に就いてからも、プレゼンやスライド作成の力は活かすことができるはず」と回答しています。

～生徒のアンケートより～

- ・クラスのなかに科学創造コースや部活動での研究活動に努め、新しいことにチャレンジする人が多かったため、自分も今まで知らなかった分野への勉強に挑戦する力が身についた。
- ・科学創造コースに所属していたことのメリットは、とにかく自由でやりたいことを後押ししてくれることである。最初は課題を与え、次に創造性を身につけ、最後は自分たちで研究課題を見つけるという流れが自分にはとても合っていた。
- ・グループのリーダーとして研究をやり遂げ、インドネシア教育大学での交流会では英語によるポスター発表という貴重な機会を得て、自分自身の成長へとつなげることができた。

9. 成果報告

ビジネスマッチングフェア

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

地元の金融機関である浜松磐田信用金庫主催のビジネスマッチングフェアに参加しました。地域創造コースの2年次から3年次にかけて行うクエストエデュケーションについて、その成果を地域に発信し、次の新たな活動へつなげることが目的です。

＜実施内容＞

『クエストエデュケーションにおける取組の発信と協働企業の発掘』

「浜松学芸高校 地域創造コース」としてブースを出展し、「衣」「食」「住」3つの観点から、コースの活動についての成果発信や興味を示してくれた企業との情報交換を行いました。

- ・衣「注染染めを用いた商品開発」「注染浴衣を活用したイベントの実施」他
- ・食「摘果ミカンを用いたジャムの製造販売とオリジナル商品の開発」他
- ・住「オリジナル積み木を用いた子供向けイベントの実施」他

＜振り返り＞

「展示パネルや小物などのレイアウトと準備」「当日の来訪者対応」など、メインタスクのほぼすべてを生徒が行うことで、自分たちの活動を分かりやすく言語化して説明する力、相手の話を聞いて求められている情報や対応を察知する力など、これまで育ててきたスキルを総動員して対応する場となりました。また、認知度が向上してきたためかブースへの来場者が多く、取り組み成果の発信以外にも、生徒らが自分たちの活動を地域の皆様に認めてもらうことで、自己肯定感や自己効力感を高める場となったことも収穫だったと感じています。



▲当日の様子



▲当日の様子

高校生探究・情報コンテスト

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

静岡大学主催の探究・情報コンテストは、本校の科学創造コースにおける継続研究のマイルストーンと位置付けられています。すなわち、年間発表の中間地点として、外部から有益なアドバイスをを得ることで、今後の研究指針の参考にするというものです。本コンテストは、研究成果の発表を通じて論理的思考力や課題解決能力を養う機会となるだけでなく、他校の発表を通じて異なる視点を学ぶことができる貴重な場となっています。特に、科学創造コースの生徒にとっては、自らの研究を客観的に評価し、発表技術を向上させる機会として重要な意味があります。また、本コンテストへの参加によって学外での発表経験を積むことで、将来的な学会発表や研究活動へのステップアップにもつながると考えられます。



▲公募チラシ

＜実施内容＞

2024年11月10日に静岡大学浜松キャンパスを会場として高校生探究・情報コンテストが開催されました。学校行事の関係上、11月中旬は中間試験や探究部活動オープン、修学旅行などの学校行事が重なる時期でしたが、科学創造コースから計10チームがポスター発表を行いました。発表内容は生物学、睡眠、芸術、医療など幅広い分野にわたりました。以下が発表タイトルの一覧と当日のタイムテーブルです。

発表タイトル一覧

- ・Free-to-play ゲームの課金による勝敗への影響
- ・日焼けを短縮する食べ物は本当に効果があるのか？
- ・新睡眠入門
- ・「面白い」って何だ？
- ・自宅で簡単ドライバー飛距離アップ！？
- ・自律神経を整える生活習慣
- ・勉強やりましょう！
- ・難病患者とのコミュニケーション
- ・センダンの実～どこに行くのか～
- ・恵みの雨～セミとの関係～

タイムテーブル

10:00 - 11:00	受付・ポスター設置
11:00 - 11:30	開会・説明
11:30 - 12:30	セッション 1
12:30 - 13:30	昼休憩・入れ替え
13:30 - 14:30	セッション 2
14:30 - 15:30	休憩・集計作業
15:30 - 16:00	表彰・講評
16:00	閉会

生徒たちは、スモールステップを設定し、「いつまでにどの作業を完了させるべきか」という工程を明確にしながら準備を進めました。その結果、期日までにポスターを完成させ、校内での発表練習を実施することができました。

本コンテストの特徴として、文系・理系を問わず多様な学校の発表内容や発表方法を学ぶことができる点が挙げられます。他校の発表を通じて異なる視点を得ることで、自分たちの研究をより深く見直す機会となりました。静岡県内の高校による発表が多かったため、身近な学校との交流の場としても有意義でした。さらに、開催場所が近隣のキャンパスであるため、生徒にとって参加のハードルが低く、工学部や情報学部への関心を高めるきっかけにもなりました。同時期に開催された静岡大学の学園祭「テクノフェスタ」と併せて参加することで、進路選択の参考にもなったと考えられます。

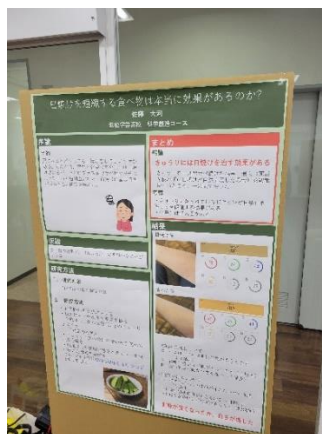
＜成果の検証＞

本コンテストを通じて、生徒たちは研究の内容だけでなく、発表技術の重要性を再認識する機会を得ました。科学創造コースの2年生は発表技術において未熟な点があり、今後さらなる向上が求められます。かつては校内でのみ発表・交流を行っていましたが、高校生探究・情報コンテストに参加することで、より客観的な評価を得ることができました。本コンテストをはじめとする外部発表の機会を高校2年生の中間発表の場として継続して活用していくことが望ましいです。

本年度のコンテストでは、2つの研究がそれぞれ奨励賞および挑戦的課題チャレンジ賞を受賞しました。これらの成果は、生徒たちの努力の結果であり、探究活動の成果を外部に認めてもらうことの重要性を実感する契機となりました。来年度以降もこのコンテストへの参加を継続し、発表技術の向上と研究の深化を図っていきたいと考えています。



▲事前練習の様子



▲当日掲示されたポスター



▲発表の様子

第4章 外部との連携の検証

1. 青森中央高校との協働事例

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

本研究での目的の一つに、自校で実施するプロジェクトを他校でも実施できるようにするためのプラットフォーム整備があります。これまでの研究でポスタープロジェクトについて、多くの高校との協働からほぼ実践パッケージ化が完了しました。本年度は、食のプロジェクトや動画制作のプロジェクトについて、実際に実施する際の問題点や必要時間の検証が課題でした。こうした検証のために、既にポスタープロジェクトや学校紹介プロジェクトで協働した実績のある青森中央高校の協力を頂き、動画制作のプロジェクト検証を行いました。

＜実施内容＞

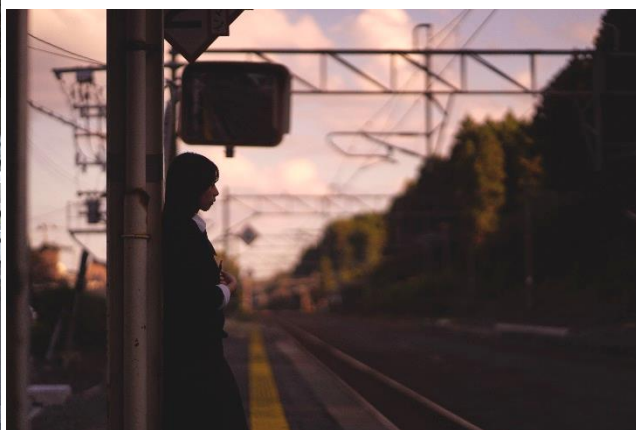
これまでポスター制作や学校紹介動画を制作した青森中央高校と、2日間の期間で地域の魅力を発信するためのフィールドワークと動画制作に取り組みました。広範囲を短い時間の中でフィールドワークすることができないため、事前にオンライン会議を重ねて青森中央高校の生徒が行ったフィールドワークの結果を共有しました。学校周辺を走る「青い森鉄道」の沿線に焦点をあて、多くの生徒が利用するこの鉄道を舞台に何気ない日常を表現することを計画しました。当日は沿線の駅を丁寧にフィールドワークし、撮影活動に取り組みました。慣れない撮影に苦労しながらも、動画とそれをPRするポスターの制作を終えることができました。

＜成果と検証＞

これまでのポスター制作と比べて、動画制作はその実施には高いハードルが存在します。その理由は、動きが入るため撮影回数が多くなることや水平など撮影のためのセッティングが重要であることなどがあります。他にも、編集には高い性能のPCが必要な点もハードルとなっています。SNSで動画を発信することが主流となっている中で、この取り組みは青森中央高校の公式SNS解説にも繋がりました。制作した動画は青い森鉄道にも認められ、公認をいただくことができました。協働が1回だけの試行に終わらず、継続的な関係を構築できたからこそ難易度の高い取り組みに挑戦することができたと感じました。一方で、編集作業においてはソフトやハードの両面での整備が必要なことや音源の問題など、今後の課題として検証していく必要があると感じました。



▲青い森鉄道沿線での動画撮影活動の様子



▲動画のPR用に撮影したポスターカット

2. 開建高校との協働事例

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

地域創造コース3年生で行う「コース紹介動画」プロジェクトは、生徒自らが自分たちの活動の魅力を地域の発信するプロジェクトです。この活動は、クラス全員が参加して動画を制作するチームビルドとしての観点と、生徒の主体的な活動を地域の中学生にPRする広報としての観点を含んでいます。これまで学校紹介動画制作のプロジェクトを青森中央高校と実践検証してきました。当時は参加人数も少なく、限定的な活動でした。そこで、本年度は京都市立開建高校と協働実施することで、実践の課題や効果を検証しました。

＜実施内容＞

9月14～16日の3日間で、本校と開建高校の生徒が協働して動画を制作するアイデアソン形式のプロジェクトとして実施しました。両校合わせて50名ほどの生徒が参加し、学校の魅力を発信する動画制作に取り組みました。事前にオンライン会議を重ねて内容を検討しましたが、実際には計画通りに進まないことが多々発生しました。その都度、上級生や本校生徒が協力し、計画を修正しながら作り上げることができました。

＜成果と検証＞

学校紹介動画の制作は、生徒達自らが学校の魅力を発信するため、生徒募集の観点からも高い効果が期待できます。実際にオープンスクールで上映した際には、大きな反響があったそうです。参加した生徒達の中には当初は主体的に参加できない生徒もいましたが、撮影最後には一体となって活動の熱量が上がっていくのを感じていました。今回取り入れた「長回し」の手法は、生徒達のチーム力を向上させるためにも重要な要素であったと分析しています。探究的な学びの成果を校内で完結させるのではなく、外部に発信していくという変化が必要です。こうしたデジタルメディアを活用した活動は、外部への発信との相性は良いと感じました。

一方で、撮影機材や技術などプロジェクトの実行にはある程度の修練が必要で、実行する教員も事前に試行してみることが必要です。教育のDX化が進む中で、教育現場にもこうしたデジタル機材の充実が進み学びの成果を発信する活動が活発化するのではないかと考えています。その際に、学校の魅力を生徒自ら発信するこのプロジェクトは生徒と学校の双方にとって高い効果があると感じました。



▲撮影した動画をのぞき込み確認する様子



▲壁面のボードを使ってアイデアを共有

3. 高知県安田町との協働事例

＜カリキュラム上の位置づけと目的＞

本校では修学旅行改革に取り組んでおり、自分達の地域で取り組んできた地域の魅力を発信するポスターや動画制作の手法を他地域で実行してきました。訪問先にとっては外部の視点を取り入れた地域の魅力を再発見する機会となり、学校と訪問先の双方にメリットがある活動になっていました。昨年度、種子島で実行したポスター・動画制作プロジェクトが新聞やテレビなどで大きく報道され、多くの方々に注目して頂きました。本年度、この取り組みに注目していただいた高知県安田町から協働の打診を頂きました。夏休み期間を利用して、発展的な活動に取り組む部活動の社会科学部地域調査班の生徒達4名とともに現地で活動しました。今回の協働は、行政と協働した現地調査から撮影活動までの PPP（官民連携プロジェクト）として実施しました。

＜実施内容＞

高知県安田町様からの打診を頂いた時は、生徒の中でどのような場所か全く想像がついていませんでした。役場の方とオンライン会議を重ねる中で、地域に高校がないことや人口規模の小さな町であることが分かり、人口減少が大きな問題となっていることが分かりました。周辺市町村と連携して観光政策を進めるなど、観光によって関係人口を増加させようと取り組む中で、町の魅力を発信したいという想いを共有していただきました。担当者の方から伺った海や山、川という「自然豊か」という魅力は、実は同じような場所は日本の様々な地域に数多く存在することに気がつきました。そこで安田町に暮す方々はもちろん、かつて安田町に暮らしていた方にも町で暮らしていた時間を思い出してもらおうと、地域で暮らしていた方々の青春の時間を生徒達が表現することに決めました。仲間達と過ごした時間を自然豊かな景観を合わせることで、より地域の魅力に共感できるのではないかと考えました。

実際の活動では訪れたことのない場所で撮影活動を行う難しさに悪戦苦闘しました。Google Map のストリートビューなどを利用して事前にリサーチは行いましたが、実際に訪れるとイメージ通りに撮影ができず、現地で何度も調査や調整を行いました。役場の方の力も借りながら、6枚のポスターと1本の動画を完成させることができました。完成したポスターは役場やごめん・なはり線の駅などに掲示していただき、地域の方からも反響を頂いているそうです。

＜成果と検証＞

制作したポスターは、現在、町役場や沿線の駅でも掲示され、今後高知駅前の観光施設でも掲示されることが決まりました。また制作した動画は YouTube にて公開していますが、この動画も町役場や観光施設で上映していただけることが決まりました。自分たちの活動が認められ、参加した生徒達は大きな自信になるとともに、さらに他地域の魅力発信に挑戦したいという意欲の向上がみられました。

修学旅行で実施していた地域の PR ポスター制作は、もともとは自分たちの地域の魅力発信活動が他地域でも実行することができるか、その手法を検証する目的から始まりました。活動成果を発信していたことで、同じように課題を抱える地域から協働の打診がはいり、本校での活動の効果が他地域でも認められていることを実感しました。これは、本校で実施しているプロジェクトが自校でした実施できない特性に特化したものではなく、どのような地域や学校で

も導入できる汎用性が高い取り組みであることを証明しています。今回は現地の学校との連携はできませんでしたが、今後は現地の学校を巻き込みながら地域の魅力を発信する探究的な学びのプロジェクトとして実践を取り入れて頂ければと願っています。



▲安田町での撮影活動の様子



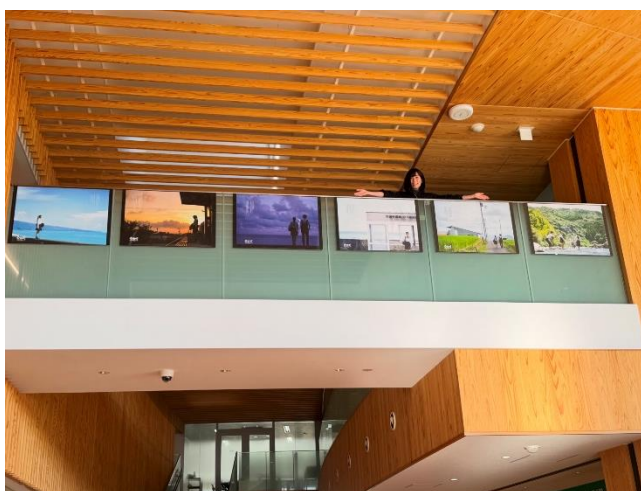
▲役場や新聞社の方と意見交換を行う



▲制作したポスター①



▲制作したポスター②



▲町役場の中に大きく掲示していただく



▲安田町の広報誌にも活動が掲載

第5章 課外活動との連携の検証

1. 防災と観光を組み合わせたビジネスプランの構築

政策金融公庫ビジネスプラン・グランプリの事例

<カリキュラム上の位置づけと目的>

社会科学部地域調査班は、地域での探究的な学びをさらに深める活動に取り組む部活動です。所属する生徒は、自分たちの取り組みを様々な大会やコンテストで発信しています。外部からの評価をいただく事で自分たちの活動を見直し、さらに活動を発展させています。今回参加した3名は、1年次にはそれぞれ防災と観光に分かれてプランを構築していました。お互いの活動を見ているなかで、特性の異なる3人が集まったら楽しいことができるのではないかと考えたようです。それぞれが持っていた関心の分野を組み合わせ、アイディアの構築に取り組みました。

<実施内容>

防災と観光に分かれて取り組んでいた生徒ですが、その2つの分野がどう結びつけるのかのアイディアがなかなか見つからない状態が続きました。ダークツーリズムやウェルネス向上など様々な可能性を考えましたが、観光の本質を考えることで最終的なアイディアにたどり着きました。災害や防災というと、どうしてもネガティブなイメージがあります。これを観光という楽しい要素を加えることで、ポジティブな活動に変換できると考えました。防災と観光を組み合わせることで、新たな地域資源を創出することを計画しました。

プランの中では、普段はできないような避難所を設営することや防災食アレンジ、VRを利用した避難体験など、地域の企業や大学の専門性を反映して構築することができました。実際に自分たちで試してみることで、その実現の可能性や費用面などを検証することができました。

また実際のプレゼンテーション発表に向けて、災害というネガティブな要素をポジティブに感じてもらえるようにPOPな表現を用いた資料や子供番組風の明るい印象で表現しました。防災訓練を義務として実行するのではなく、楽しさを加えることで何度も経験してみたいくなる仕掛け作りを目指しました。政策金融公庫主催の高校生ビジネスプラン・グランプリでは、5151プランの中の最終10選に選出いただき、東京大学で行われる最終審査に挑みました。結果は残念ながら2位となる準グランプリでしたら、当日の発表では多くの反響をいただき、企業や他校からたくさん声をかけて頂きました。

<成果と検証>

高校生が参加できる大会やコンテストは年々増えており、多くの発表の場があります。その中でも最難関とされる政策金融公庫主催のコンテストは、企画資料の作成やプレゼン力など総合的な力が求められます。実際に運営することを想定した収支計画や、5年後のビジネスモデルを意識した提案など、アントレプレナーシップを意識したつくりになっています。学校の授業では学ばないような内容を、企業の方や大学の先生・学生との意見交換を経て、何度も何度も修正しました。最初に制作したエントリーシートと比べると最終的に発表した資料は大きく変わっています。長期的にコンテストに関わることで、一度作成した資料も何度も何度も見直し修正するクリティカルな物事の見方ができるようになりました。異なる特性の仲間が互いに認め学び合う場を形成することができ、目指す探究的な学びを実現することができました。



▲発表資料 POP なイメージで制作



▲文字サイズや色など全体のバランスを重視



▲資料の作成も経験をつみ上達していく



▲「備える」から「備エール」へ繋がる構成



▲実際に自分たちでプランを実行検証



▲コンテストでの発表の様子



▲準グランプリ受賞の様子



▲静岡県副知事への表敬訪問

2. 動画やポスター制作を通じた地域の魅力発信

高校生CMコンテストの事例

<カリキュラム上の位置づけと目的>

ポスタープロジェクトは、様々な地域の学校と協働して実践することができるようになりました。本校でも、そのノウハウを後輩達に継承しようと異なる学年の生徒たちが集まり制作活動に取り組んでいます。活動を持続させるために、外部コンテストを活用した取り組みとなっています。

<実施内容>

休日を使い、地域にどのような魅力があるか丹念にフィールドワークを重ねました。本年度は浜名湖と浴衣を制作のテーマに据え、イメージに合う撮影地を探して歩きました。当初、生徒たちが予定していた場所ではなく、偶然見つけた場所で撮影した作品をコンテストに提出することになりました。普段、見えていると思っていても見過ごしてしまっている場所や風景があり、そこに新たな魅力を感じて急遽撮影しました。何気ない日常に価値を見いだして、丁寧に作品を創り出すことで、多くの方々に共感してもらえたと感じています。

<成果と検証>

この取り組みは、地域の魅力を発見するフィールドワークと、撮影やコピーライト作成技術の習得を目的に実施しています。単に撮影するのではなく、どんな魅力を発信するためにどこでどのように撮影するのか、考えながら活動しています。こうした撮影や制作のノウハウが先輩から後輩に受け継がれていくことは、活動の持続に繋がっていると感じました。地域の広告代理店として自分たちの活動を位置づけ、探究的な学びを始めた当初から現在まで継続しており、ARTの力を地域に還元し続けているといえます。

制作したポスターと動画は、第19回高校生CMコンテストにおいて両作品とも特別賞をいただくことができました。コンテストを利用し、制作した作品へのフィードバックを頂くことができ、今後の改善にいかすことができます。外部評価を活用することによって、自分たちの活動を客観的に見つめることができるようになりました。



▲写真の選定やコピーライト作成も行う



▲制作した浴衣の魅力発信ポスター

第6章 報道掲載
＜新聞掲載＞



▲中日新聞(2024年6月18日)



▲静岡新聞(2024年9月30日)

浜松学芸高

グランプリ

高校生が浜松市の特産食材を使ったおにぎりを考案し、販売する「おにぎりフェスティバル」が29日、同市中央区砂山町のサザンクロス商店街で開かれた。購入客の投票で、遠州産じゃこ
と粉チーズを使った「じゃこちー」を提案した浜松学芸高が2年連続のグランプリを受賞した。（長谷川竜也）

遠州産じゃこ+粉チーズ 絶妙

参加したのは同高のほか、浜松大学、浜松南院、オイスカ浜松国際高の6校。各校がキッチンカーの業者と組み、300個のおにぎりを販売し、全校のおにぎりが完売した。

浜松学芸高は、1年前に授業でアイデアを出した「じゃこちー」をフェスに向けて改良してきた。親子連れの客が多いと見込み、子どもでもおいしく食べられるように粉チーズを減らしてじゃこを多めにし、あられをトッピングして冷めたらお茶漬けにできるように工夫を凝らした。遠州産じゃこを販売する「Kan Kans」と協力し、約40分で完売したという。

いずれも同高地域創造コースの2年、飯田穂花さん、山田采実さん、浅井悠理さん、鈴木彩子さん、森下雄仁さんが参加。飯田さんは「誰か一人でも欠けていたら今の形にはなっていない」と振り返った。

イベントは砂山町などでホテルを経営する「アセント」（中央区砂山町）が企画し、昨年に続き2回目の開催。実行委員会の谷下沢卓也さん（47）は「学生や近所の人々がたくさん集まってもらいはってほしい」と話した。

おにぎりフェス

▲中日新聞(2024 年 9 月 30 日)

生徒が制作したショート動画（同校提供）

動画撮影に励む生徒ら＝浜松市浜名区の県立森林公園森の家

浜松市中央区の浜松学芸高地域創造コースの1年生が、浜名区の県立森林公園の魅力を紹介するショート動画を作成した。近く同公園の宿泊施設「森の家」のインスタグラムで公開する。

森林公園PR動画 浜松学芸高生作成

「インパクト 大切に」

豊かな自然など魅力発信

1年生31人が森の家に宿泊しながらグループに分かれて動画撮影に臨んだ。このほど完成した動画6本を森の家職員らに披露した。自然のアカマツなど豊かな自然に囲まれた立地や景観を伝える動画や、多目的ホールでバレーなどのスポーツを楽しむ動画などが集まった。

職員らは「森の家の新たな魅力を改めて知ることができた」と感想を伝えた。1年の高橋芽生さんは「短い動画なのでインパクトを大切にしたい。中身を考へながら動画を作る難しさを実感した」と振り返った。（浜松総局・大沢 聡）

▲静岡新聞(2024 年 10 月 21 日)

摘果ミカンジャム練り込み

奥浜名湖みかん
パウンドケーキ

奥浜名湖地域で生産されているミカンの栽培過程で摘果される果実を使ったジャムの生産、レシピ開発に取り組む浜松学芸高（浜松市中央区）地域創造コースの2年生が、新レシピ「奥浜名湖みかんパウンドケーキ」を考案した。同市浜名区細江町の国民宿舎奥浜名湖で15日から販売する。

パウンドケーキ考案

浜松学芸高生 国民宿舎奥浜名湖で販売へ

2018年から摘果ミカンの活用に取り組む同コースでは昨年、ジャムを使用したプリの照り焼きとソフトクリームを生徒が考案した。フードロス削減の思いに共感した同施設が販売すると、ソフトクリームが好評を博し年間1300食以上売れたという。本年度は当初、バウムクーヘンの商品化に挑戦したが、生産効率の観点から断念。同施設から「焼き菓子にしてはどうか」と提案を受け、ジャムを生地に練り込んだパウンドケーキに決めた。高麗者の利用が多い同施設の客層を意識し、ブランドも染み込ませた。

パウンドケーキを紹介する生徒
＝浜松市浜名区細江町の国民宿舎奥浜名湖

▲静岡新聞(2024年11月13日)

摘果ミカンのジャム爽やか

パウンドケーキイける

浜名湖周辺のミカンの栽培で、意図的に間引かれて通常は廃棄される「摘果ミカン」を有効活用し、ジャム作りに取り組む浜松学芸高校（浜松市中央区下池川町）地域創造コースの2年生5人が、ジャムを使った新商品「奥浜名湖みかんパウンドケーキ」を考案した。国民宿舎奥浜名湖（同市浜名区細江町）のレストラ

浜松学芸高生が考案

奥浜名湖みかんパウンドケーキを考案した浜松学芸高の2年生（いずれも浜松市浜名区の国民宿舎奥浜名湖で）

国民宿舎奥浜名湖で15日から販売

未成熟なうちに摘み取る摘果ミカンは、残した実の品質向上に欠かせない栽培技術。同コースは持続可能な開発目標（SDGs）の観点で2021年度からジャムを作り、地元企業や店舗と協力してジャムを使用した洋菓子やスイーツ、料理などの商品化を進めている。鳥居芽紗さん（17）、鈴木杏葉さん（17）、溝口鈴さん（17）、鈴木杏葉さん（17）、伊藤茜音さん（16）の5人は当初、国民宿舎奥浜名湖を指定管理するヤタロー（中央区）のグループ「治一郎」に倣い、生地にジャムを練り込んだバウムクーヘンを目指したが、時間的・数量的に困難でパウンドケーキに方向転換した。校内での試食段階から好評で、さらに香りと深みを良くするブランドを入れるかどうかを決めるために意見を募った。生徒たちはブランド無しを好んだが、教職員は有りを絶賛。最終的に国民宿舎の客層を考慮して有りを選んだという。パウンドケーキに添えてある粗めの「追いジャム」がアクセントになっている。

鈴木杏葉さんは「皮も入っていて苦みど、実の爽やかさのどちらも感じられる」と自信作をPRした。国民宿舎では昨年10月からジャムを使ったソフトクリームも販売し、年間1300食以上が売れている。国民宿舎のスタッフもパウンドケーキを試食し「これはイケる」と商品化を後押しした。

「追いジャム」を添えたパウンドケーキ

▲中日新聞(2024年11月13日)

浜松学芸高 最終審査に進出
高校生ビジネスプラン 防災体験宿泊を提案



最終審査会への進出が決まり喜ぶ生徒たち＝浜松市中央区の浜松学芸高校で

全国の高校生らが起業や「第12回高校生ビジネス新事業のアイデアを競う」プラン・グランプリ」の最

最終審査会に進出する10案が28日、オンラインで発表され、県西部地域から浜松学芸高校（浜松市中央区）のプランが初めて選ばれた。

「グランプリ」は日本政策金融公庫の主催で2013年度から開催。今年は過去最多となる536校5151プランの応募があった。最終審査会は25年1月に東京大で行われる。

浜松学芸高のプランは、市内の廃校で2泊3日の避難生活を体験し、防災意識の向上を図るといった体験型ツアー。部活動の社会科学部地域調査班に所属する鈴木杏奈さん、清水瑠璃さん、鈴木成海さんの2年生3人がまとめた。

学校教育や企業研修での利用を想定。防災食の調理、水や洗剤が不足する中での洗濯、段ボールベッドの組み立てなど、多彩なメニューを選択できる。参加費用は1人当たり3万4千円程度と設定した。

県内では南海トラフ巨大地震の被害が想定されるが、避難生活の経験者が多いとは言えないことから、体験的に学ぶ機会を提供しようと考えを練った。

廃校を活用し、賞味期限が近い保存食を安く仕入れるなど、費用を抑えて効果を上げる工夫を盛り込んだ。

代表の鈴木杏奈さんは「最終審査では1位を目指して頑張りたい」と意気込んだ。県内からは伊豆伊東高校（伊東市）の農業支援プランも10案に選ばれた。

（寺本康弘）

▲中日新聞(2024 年 11 月 29 日)

高校生ビジネス 2校選出
来年最終審査 伊豆伊東高、浜松学芸高



2年連続のファイナリスト選出を喜ぶ4人（28日、伊東市で）

県立伊豆伊東高と浜松学芸高が28日、日本政策金融公庫が主催する「高校生ビジネスプラン・グランプリ」でファイナリスト10組に選ばれた。伊豆伊東高は2年連続、浜松学芸高は初挑戦での進出となった。最終審査会は来年1月12日、東京で開かれる。

グランプリは次世代の起業精神の向上を図るため、2013年度に始まった。今年は最多536校から5151プランの応募があった。

伊豆伊東高では28日午後4時から、オンライン配信のファイナリスト発表を教室で見守った。名前が呼ばれると、「おお、やった」と歓声と拍手が起きた。代表の利渉美結さん（17）は「農家の協力を得るのが一番大変だった。夏休みにみんなで取り組んだ成果をみ

151プランの応募があった。伊豆伊東高のプランは、総合ビジネス科3年生4人による「『援農スポーツ』で心も体も健康に!!」。農家の人手不足解決のため、草刈りや果樹収穫などをスポーツに見立てて参加者を募り、農家を手助けする。浜松学芸高の3人が提示したのは「防災と観光で災害と共に生きる社会をつくる3日体験プラン」。地元の廃校に宿泊し、災害時の避難生活を体験し、防災意識の向上を図る。

▲讀賣新聞(2024 年 11 月 30 日)

伊豆伊東高生 浜松学芸高生

来月1月17日に都内で開かれる第12回高校生ビジネスプラン・グランプリ（日本政策金融公庫主催）の最終審査会に、伊豆伊東高アグリスポーツ部と浜松学芸高社会科学部地域調査班が出場する。地域課題の解決や防災・観光を切り口にしたプランを作成し、ファイナリスト10組に選ばれた。

伊豆伊東高は県内で初めて、2年連続で最終審査会の出場権を得た。いずれも3年の利沙美結さん、山田裕梨さん、島津脩さん、中村友花さんが「援農スポーツ」で心も体も健康に!!」と題して発表する。地元のミカン農家などが抱えている人

ビジネスプランGP最終審査へ

地域課題解決や防災、観光切り口

手不足の解決を目指し、果樹収穫や肥料まきなどをスポーツ感覚で楽しめる大会を提案する。浜松学芸高は初の応募で最終審査会への進出を決めた。考案したのは、「防災と観光で災害と共生する社会をつくる3日体験プラン」。いずれも2年の鈴木杏奈さん、鈴木成海さん、清水瑠葵さんが発表の舞台に臨む。

浜松市の廃校に宿泊して避難生活を体験できる機会を創出し、防災意識の向上につなげるプランを紹介する。

同グランプリは過去最多の536校から5151件の応募があった。YouTubeで最終審査会の様子がライブ配信される予定。

（熱海兼伊東支局・鈴木文之）

伊豆伊東高のアグリスポーツ部

浜松学芸高の社会科学部地域調査班

▲静岡新聞(2024 年 12 月 17 日)

浜松学芸高生「自信あり」

全国の高校生や高専生が事業のアイデアを競う「高校生ビジネスプラン・グランプリ」で12日の最終審査会に臨む浜松学芸高校（浜松市中央区下池川町）の生徒3人が7日、市役所を訪れ、中野祐介市長に健闘を誓った。

3人は、部活動の社会科学部地域調査班に所属する2年の鈴木杏奈さん、鈴木成海さん、清水瑠葵さん。市内の廃校で2泊3日の避難生活を体験し、防災意識の向上を図るツアーを考案した。536校から応募があった5151件のアイデアの中から最終審査に進む10件に選ばれた。

最終審査会は東京大であり、大学教授や起業家らが審査する。6分間のプレゼンテーションに向けて練習している鈴木杏奈さんは「防災と観光を組み合わせた新しいプラン。自信はあります」、鈴木成海さんは「緊張するが楽しみたい」、清水さんは「全力でプレゼンしたい」と力を込めた。

グランプリは、日本政策金融公庫が2013年度に始めた。県内では伊東市の伊豆伊東高校の生徒も最終審査会に出場する。

（戸田稔理）

ビジネスプラン最終審査 市役所で健闘誓う

中野市長もに新事業を紹介する（左から）清水さん、鈴木杏奈さん、鈴木成海さん＝市役所で

▲中日新聞(2025 年 1 月 8 日)

廃校で防災宿泊 提案

浜松学芸高 ビジネスプラン最終審査出場



浜松学芸高（浜松市中央区）の部活動「社会科学部地調調査班」に所属する2年生3人が12日、都内で行われる高校生ビジネスプラン・グランプリの最終審査会に出場する。7日、市役所では出場を中野拓介市長に報告した。

「楽しく学ぶ」アピールへ

ビジネスプランを説明する浜松学芸高の3人＝浜松市役所

3人は鈴木奈奈さん、鈴木海斗さん、清水楓さん。同市や静岡県防災訓練に力を入れていることに着目し、訓練で行うような活動に止らずに廃校で楽しみなが挑戦する。5日、日の体験プランを提案する。アルファ米でのチャート作りや簡易ベッドの制限時間内の組み立てといった項目を用意した。審査会では分間の持ち時間でプレゼンテーションに臨む。

3人は12月19日から全学教授らにも助言を仰ぎつつ、計画を練り上げた。鈴木奈奈さんは「楽しみながら防災を学ぶプランをしつかりアピールしたい」と意気込み、中野市長から素晴らしいプランなど意。グランプリを目指して力を尽くす」と激励を受けた。

高校生ビジネスプラン・グランプリは全国の356校から101件のプランが寄せられ、書類審査を通過した10校が最終審査に臨む。最終審査には県では、浜松学芸高のほか伊豆伊東高も進出した。（浜松編・松浦直希）

▲静岡新聞(2025年1月9日)

浜松学芸高準グランプリ

全国高校生ビジネス審査 伊豆伊東高は優秀賞

全国の高校生が新規事業のアイデアを競うコンテスト「ビジネスプラン・グランプリ」(日本政策金融公庫主催)の最終審査会が12日東京都内で開かれた。書類審査を通過した10校が企業内容をプレゼンし、宮城県農業高校のチームがグランプリに選ばれた。稲作の新たな栽培方法と肥料を全国の農家に提供するプランを提案した。

宮城県農業高校は、すぐに効果が出ない肥料を用いると、稲の根の成長が促されることを実証実験で明らかにした。この栽培方法は肥料にかかる費用を8割削減し、収穫も大幅に増えるという。同高3年の星野虎さん(18)はこの方法が他の作物にも応用できるかどうか

検討したい」と話した。準グランプリは浜松学芸高だった。災害時の避難生活を廃校で体験するプランを提案し、防災意識の向上につなげるのが評価された。伊豆伊東高は審査会に寄せたビデオメッセージで、優勝賞品には伊豆伊東高のラン「健康スボーズ」でも体も健康に!!」が選ばれた。

「伊豆伊東高は、審査会に寄せたビデオメッセージで、優勝賞品には伊豆伊東高のラン「健康スボーズ」でも体も健康に!!」が選ばれた。

「ビジネスプラン・グランプリ」で準グランプリとなった浜松学芸高のチーム＝12日午後、東京都文京区

「アイデアと行動力」地域を元気にしようことを期待する」と述べた。過去には、空き時間で働く学生に就業への関心を高めてもらうため2013年度に始まり今年で12回目。過去最多の356校から101校の企業が集まった。過去には、空き時間で働く学生に就業への関心を高めてもらうため2013年度に始まり今年で12回目。過去最多の356校から101校の企業が集まった。

▲静岡新聞(2025年1月13日)

浜松学芸高 準グランプリ ビジネスプラン 全国審査



準グランプリとなった浜松学芸高校のチームは12日午後、東京都文京区で

期待する」と述べた。
学生に起業への関心を高めてもらうため2013年度に始まり、今回で12回目。過去最多の536校から5千件超の企画が集まった。過去には、空き時間で働く「スキマバイト」の紹介アプリを手がけるタイミの小川嶺社長も参加した。

全国の高校生らが新規事業のアイデアを競うコンテスト「ビジネスプラン・グランプリ」（日本政策金融公庫主催）の最終審査会が12日、東京都内で開かれた。書類選考を通過した10校が企画内容をプレゼンし、宮城県農業高校のチームがグランプリに選ばれた。稲作の新たな栽培方法と肥料を全国の農家に提供するプランを発表した。

宮城県農業高は、すでに効果が出ない肥料を用いると、稲の根の成長が促されることを実証実験で明らかにした。この栽培法は肥料にかかる費用を8割、人件費も大幅に減らせるという。同高3年の星碧虎さん（18）は「この方法が他の作物にも応用できるかどうかを検証したい」と話した。

準グランプリは浜松学芸高校だった。災害時の避難生活を廃校で体験するプランを提案し、防災意識の向上につなげる点が評価された。

石破茂首相は、審査会に寄せたビデオメッセージで「アイデアと行動力で地域を元気にしてほしい」とことを

▲中日新聞(2025年1月13日)

浜松学芸高 初挑戦で準V 「防災学べる観光」提唱

ビジネスプラン・グランプリ



準グランプリの表彰を受ける浜松学芸高の3人

日本政策金融公庫が主催する「高校生ビジネスプラン・グランプリ」の最終審査会が12日、東京都文京区の東大で開かれ、本県から出場した2校のうち、浜松学芸高が初挑戦で準グランプリを獲得した。県立伊豆伊東高は優秀賞を受賞した。

今年は最多536校から5151プランが寄せられ、ファイナリスト10組に本県から2校が選ばれた。浜松学芸は「防災と観光で災害と共に生きる社会をつくる3日体験プラン」を提唱。同校の3人は最終審査で、防災食のアレンジ料理、廃校での避難生活体験などをパッケージにして楽しく防災知識を学べると説明し、「防災と観光を結びつけて新たな地域資源を生み出す」と売り込んだ。

審査で「防災体験に楽しさと選べることを取り入れた」と評価された。メンバーの鈴木成海さん（2年）は「とてもうれしいけど、グランプリを目指していたので、悔しさもある。指摘を生かしてよりよいプランにしていきたい」と話した。2年連続で最終審査に臨んだ伊豆伊東は農作業とスポーツを結び付けた「援農スポーツ」で心も体も健康に!!というプランで挑戦。「人手不足の農家を子

育てファミリーがゲーム感覚で手助けできる」と強調した。

▲読売新聞(2025年1月15日)

浜松学芸高が準グランプリに

日本政策金融公庫は第12回「高校生ビジネスプラン・グランプリ」の最高賞に宮城県農業高校（同県名取市）のチームを選んだ。従来の製品に比べて肥料のコストを大幅に削減できる点などを評価した。準グランプリは防災と観光を組み合わせた旅行プランを提案した浜松学芸高校（浜松市）のチームが受賞した。

12日の最終審査会には書類選考を通過した10組が登場。熊本県立玉名工業高校（同県玉名市）、智弁学園和歌山高校（和歌山市）、早稲田大学本庄高等学院（埼玉県本庄市）の3組が審査員特別賞となった。

参加対象は高校生と高専の1～3年生で、第12回は過去最多の536校、5151件の応募があった。日本公庫は職員がビジネスプランづくりを助言する無料の出張授業も開いており、今回は461校で実施した。

▲日本経済新聞(2025年1月16日)

浜松学芸高準グランプリ

高校生ビジネスプラン

準グランプリに輝いた浜松学芸高の（右から）鈴木成海さん、鈴木杏奈さん、清水瑠葵さん。東京都文京区本郷の伊藤謝恩ホールで

「楽しく防災」に高い評価

高校生が起業アイデアを競う「第12回高校生ビジネスプラン・グランプリ」（日本政策金融公庫主催）の最終審査会が12日、東京都内で行われ、「防災と観光で災害と共に生きる社会をつくる3日体験プラン」を提案した浜松学芸高（浜松市中央区）の社会科学部地域調査班の2年生3人が準グランプリに選ばれた。

最終審査会では全国536校5151件の応募から選ばれたファイナリスト10組が審査員を前にプレゼンを実施した。浜松学芸高・同調査班は鈴木杏奈さん、鈴木成海さん、清水瑠葵さんの3人が、廃校に宿泊して災害時の避難生活を体験することで、楽しく防災知識を学ぶプランを説明。6分の持ち時間で災害というネガティブな話題を明るくまとめた。

講評で審査委員長の高橋徳行・武蔵大学長がコストや運用部分での課題を指摘しつつも、「防災に楽しさを取り入れたことを高く評価した」と説明した。

【若井耕司】

受賞を受けて鈴木杏奈さんは「グランプリを狙っていたので嬉しい部分もあるが、直す部分も明確になった。今後プランを現実にいきたい」と話していた。

最終審査会には伊豆伊東高（伊東市）のアグリスポーツ部も「援農スポーツで心も体も健康に!!」とするプランを提案し、優秀賞となった。

▲毎日新聞(2025年1月16日)

準
グランプリ

防災と観光で災害と共に生きる社会をつくる3日体験プラン

浜松学芸高校
社会科学部地域調査班

★
(★は日本政策金融公庫提供)



リアルな避難生活 体験型ツアーに



廃校を活用



準グランプリに選ばれたのは、浜松学芸高校の「防災と観光で災害と共に生きる社会をつくる3日体験プラン」。災害時の避難生活を体験型ツアーとして楽しみながら、防災意識を高めてもらう狙いがある。社会科学部地域調査班の3人が考えた。

プランでは、防災食の調理や少ない水での洗濯など、避難生活で強いられるさまざまな「ミッション」を用意。26種類の中から、利用者が挑戦してみたいミッションを選び、自由に組み合わせてツアーを作る。宿泊には浜松市内の廃校を利用。主に修学旅行での利用を想定していると

いう。

3人は「若い世代の意識を育てることで、地域全体の復興力の向上につながる」と説明。自然災害への備えがますます重要になる中で、楽しみながら防災に関する知識を学べるプランとしたことが評価につながった。



★
衣装にもこだわり、コミカルな発表で聴衆を引きつけた

▲読売中高生新聞(2025年1月31日)

浜松学芸高生 全国高校生ビジネス審査 2位

目を引く発表 高評価

廃校を舞台に、炊き出しや簡易ベッド設置、脱出ゲームなど26種類の「クエスト」を組み合わせるツアーを提案。都市型や家族向け、外国人対象といったバック商品も用意した。

防災宿泊ツアーを提案

全国の高校生が新規事業のアイデアを競う「第12回高校生ビジネスプラン・グランプリ」で、2年生3人で出場した浜松学芸高(浜松市中央区)が準グランプリに輝いた。宿泊型の防災訓練を観光資源として発信するユニークな企画を考案し、寸劇のような形式を取り入れた目を引く発表方法も高く評価された。リーダーの鈴木杏奈さん(17)は「それぞれの個性ががみ合い、チームワークが良かった」と笑顔を見せた。



準グランプリに輝いた(右から)清水さん、鈴木杏さん、鈴木成さん
＝浜松市中央区の浜松学芸高

期費用を抑え、大人数をまとめて受け入れることで「5年で黒字化できる」などと事業としての可能性もアピールした。

プレゼンの主力を務めた清水瑠葵さん(17)は「人前で話すのは得意ではなかったけど自信になった」、資料づくりに注力した鈴木成海さん(17)は「色の効果や使い方まで意識した」とそれぞれ語った。

大会には全国536校から5千件超の応募があった。書類選考を通過した10校が都内で1月に開かれた最終審査会に臨んだ。

(浜松総局・岩下勝哉)

▲静岡新聞(2025年2月27日)

浜松学芸高と伊豆伊東高

ビジネスプラン入賞報告

県庁



第12回高校生ビジネスプラン・グランプリ（日本政策金融公庫主催）で準グランプリに選ばれた浜松学芸高と優秀賞を受けた伊豆伊東高の生徒がこのほど、県庁を訪れ、増井浩二副知事に結果を報告した。

浜松学芸高は廃校に宿泊して避難生活を体験できる高校生ビジネスプラン・グランプリで入賞した生徒ら

県庁

機会を創出し、防災意識向上につながるプランを提案した。生徒は「防災訓練にはネガティブなイメージがある。どうすればポジティブに楽しんでもらえるかを考えた」と企画の意図を説明し、「仲間と支え合いながら過ごした時間はかけがえない最高の時間だった」と振り返った。

伊豆伊東高は農家が抱える人手不足の解決に向け、摘果作業や肥料まきをス

ポーツ感覚で楽しめる子育て世代向けの大会を開催する企画を紹介。生徒は「（農業とスポーツを組み合わせた）アグリスポーツの知名度向上に向けた取り組みを続け、農家の人手不足解消につなげたい」と話した。

増井副知事は「長い人生の中で今回の経験はとても役立つ。取り組みを通じて一段と成長したと思う」とたたえた。

▲静岡新聞(2025年2月28日)